

資料① 日達上人御講義「二箇相承について」(昭和三十四年八月二日 第二十五回夏期修養会)

「今三大秘法抄を拝読いたしますと、戒壇とは王法に冥じ仏法に合して王臣一同に本門の三秘法の法を持ちて有徳王・寛徳比丘の其及往を末法濁悪の未來に移さん時勅宣並に御教書を下して靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か時を待つ可きのみ事の戒法と申すは是なり、三箇並に一間淨提の人・懺悔滅罪の戒法のみならず大梵天王・帝釈等も来下して踏みたもうべき戒壇なり」(全一〇二二)と仰せられておられます。

この戒壇、即ち大聖人の戒壇は本門の戒壇でございます。本門寺の戒壇でございます。勅宣並に御教書が有り広宣流布の時に建立するものでございます。ここに勅宣並に御教書と申しますと、現在の時代においては誰でも合わないじゃないかという質問又疑惑があるものでございます。天皇が戒壇建立を許可し一切の人々がそれによって戒壇を建立するということとは、日本では、もう天皇の力が無いじゃないかというようなことをいっているのでございますが、広宣流布の聖王は即ち広宣流布の時の聖王は転輪聖王であるのでございます。必ずしも今の天皇陛下が建立主となるべき時の天皇とは違っております。又大聖人も、そうはおっしゃっていただいております。又この御書に照らし経文に照らすときは広宣流布の時には転輪聖王が出現するということになっておるのであります。そのときの聖王こそ天皇であられ、誰であられ、兎に角広宣流布の時に全国一致してみんな共に戒壇を建立する時こそ、事の戒壇建立と考へなければならぬのであります。

資料② 日達上人御講義「千日尼御前返事」(昭和四十年九月十五日 平安寺御親教の砌)

「例せば、これを覚えていけば、南閻浮提」この世界中には「八万四千の国々」がある、世界中に沢山の国々がある、その国を治める沢山の王はあるけれども、その王は一応その国において大王である。しかし、この世界中の根本の王様、「転輪聖王」今は、これを轉輪聖王と申しますが、これは須弥四州を統御する所の王様を轉輪聖王といふ。これは、権力を持って征伐して勝つた王様ではない、あらゆる法を以て慈悲を以て世界を統治する所の大王を、これを轉輪聖王といふので、轉輪聖王は即ち大王であります。轉輪聖王は決して自分から武力を持って戦うんじゃない、悪に対しては、自ら輪宝を転じて、これを打ち破るといふんです。轉輪聖王の輪宝といふのは、よく御本尊様のお厨子の真中にあるあの紋です。轉輪聖王は、悪いものに対しては、あの輪宝を投げる。それによって悪をいっしょ伏すのであります。法を以て、悪をいっしょ伏す。今、広宣流布の時になって、初めて妙法が流布された時、妙法を以て世界に流布した人が轉輪聖王であります。その轉輪聖王に対して、いかなる世界の大王も、皆、小王である。」

資料③ 日達上人御説法「正本堂の意義について」(昭和四十七年三月二十六日)

「又、三秘抄の王という言葉をもち、日本の天皇と断定しているのは、結局は明治時代、勿論大正、昭和の初めにかけてもですけども、国立戒壇という考えの上から、こういう言葉が出たものと思ひます。ところが、我が宗では眞実をいふと、古来から広宣流布の時の國王は轉輪聖王である。しかも轉輪聖王の内、最高の金輪聖王である。こう相伝しておるのでございます。皆様、それを忘れておられるかも知れませんが、既に明治時代以後、それを忘却しておられる人が多くなったのでございます。その一期弘法抄や三秘抄に於ける王は天皇それ故に、直ちに明治時代に於いては、国立という觀念から、この一期弘法抄や三秘抄に於ける王は天皇だと、こう断定してしまつたのであります。この考えは、日本が世界を統一するんだという考えのもとから天皇が轉輪聖王だという考えが起つたものではないかと思はれるのであります。ところが、御書を拝しますと、王といふのは一國の王といふのではなく、より高次元の意味で使われております。北条家に対しては、「僅か小島の主に恐れては閻魔法王の責めを如何せん」といふ御書もございまして、この島の長がどうして一間淨提広布の時の轉輪聖王といえましようか。なかなか簡単に云えないと思つておられます。これについて、先程さしあげた掘堀下が、日恭上人の伝を少し書いておられます。それにこういうことが出ております。

「印度の世界創造説は全世界中の各史に勝れて優大な結構であり、又其に伴ふて世界に間出す轉輪聖王の時代と世界と徳力と威力と宝力と眷属との説が又頗る雄大であつて、其中に期待する大王は未だ吾等の知る世界の歴史には出現して来ぬ。」

「唯僅に彼の阿育王が世界の四分の一を領する鉄輪聖王に擬してあるばかりである。仏教では此四輪王の徳力等を菩薩の四十位に對当してあるが、別して大聖人は此中の最大の金輪王の出現を廣宣流布の時と云はれて居る程に、流溢の廣宣は吾人の想像も及ばぬ程の雄大であるが小腕、蹶急の吾人はこれを待ちかねて致つて小規模に満足せんとしている。(乃至)金輪王には自然の大威徳あつて往かず戦はず居ながらにして全須弥界四州の國王人民が信伏する。」

「已に地涌の大菩薩・上行出でさせ給ひぬ結要の大法亦弘まらせ給うべし、日本、漢土・万国の一切衆生は金輪聖王の出現の先兆の優曇華に値ふるなるべし」

こう説かれております。大聖人様が出現して、いよいよ広宣流布になる時には、この金輪王が出現するんだ。

B-4

その為、大聖人様がこうしておられるのは、金輪聖王の出現のためのお祝いの、優曇華の華に値ふるが如くであるということをおっしゃっております。だからこれらを見ても大聖人様の考えは広宣流布の時には金輪聖王が出現するのである。そして戒壇を建立する。その時には法王は我々の日目上人、一間淨提の座主日目上人の出現、ということはお、本宗の伝統的相伝であります。これを皆な忘れて、簡単に三秘抄或いは一期弘法抄の時の王様は天皇だということをお忘れ、それで又、国立戒壇ということをおっしゃる。それを今、そういう考えを改めて、昔の仏教の精神に返らなければならぬと思つておられます。で、更にここで今度は第二番目の出世間の内感的に考へていくと王といふことはどうであるかと、こう考へていきます。

そうすると御教書に、一番最後の厳王品のところには、この「王とは中道なり」と仰せになっております。又、法門可被申儀事に、「仏は一間淨提第一の賢王・聖師・賢父なり」と仰せになっております。ここに於て仏の言葉をお聴きし、勅宣と申されておられる。仏を賢王と申される故であります。で、三秘抄・一期弘法抄の戒壇建立について、もし世間儀典的な考へを以てするならば、広宣流布が完成した時には轉輪聖王が出現して建立するということになる訳で、その轉輪聖王は結局誰かといへば、御教書に云く、本地身の仏とは此文を習うなり、祖とは法界の異名なり、此れは方便品の相性体の三如を祖と云うなり、この三如はより外に轉輪聖王之れ無きなり、轉輪とは生住異滅なり、聖王とは心法なり、この三如は三世の諸仏の父母なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は三世の諸仏の父母にして、其祖轉輪聖王なり。金銀銅鉄とは金は生・銀は白骨にして死なり、銅は老の相・鉄は病なり、此れ即ち開示悟入の四明知見なり、三世常住に生死死とめぐるを轉輪聖王と云うなり。この轉輪聖王出現の時の輪宝とは我等が吐く所の言語音声なり。爰を以て平等大慈とは云うなり。と、このように仰せられておられます。即ち金銀銅鉄の輪王は、我等大聖人の弟子檀那の南無妙法蓮華經を唱え奉る者の当代である、といふべきであります。

故に出世間の内感的に於ける戒壇建立の相を論ずるならば、三秘抄の王法弘法等の言葉は、大聖人の弟子檀那の南無妙法蓮華經の信心を離れては存在しないのであります。我等、弟子檀那の末法に南無妙法蓮華經と修行する行者の己心にある有徳王、寛徳比丘のその昔の王弘冥合の姿を其のままに末法濁悪の未來に移さん時、と申されたことと申すべきであります。三秘抄に有徳王・寛徳比丘とあれば、じゃ有徳王とか寛徳比丘という人物はいつ出て来たか、又そういう人と同じ人があるのかといわれる時に、有徳王・寛徳比丘は涅槃經におけるところの釈尊己心の世界の人物である。しかも今、末法に於て、我々大聖人の弟子檀那が南無妙法蓮華經と唱へる、我々の己心において有徳王・寛徳比丘の王弘冥合の姿こそ、我々の己心にあると考へなければならぬのであります。これ美に我々行者の昔の己心の姿を顕されておられると拝すべきであつて、その己心の上に勅宣並に御教書があらうるのであります。

即ち、広宣流布の流溢への展開の上に靈山浄土に似たる最勝の地、富士山天生ヶ原即ち大石ヶ原に戒壇建立があるべきであります。故に、今回の正本堂こそ、今日における妙法広布の行者である大聖人の弟子檀那が建立せる一期弘法抄の意味を含む本門寺の戒壇であると申すべきであります。

資料④ 日達上人御講義「教行証御書」(日達上人全集第二輯第四卷)

「このために、釈尊滅後、正法年間・像法年間・末法と分かれては、その末法の時代に釈尊の法は、經文、即ち釈尊の法書の書かれてある經文、それによつての修行も、それによつての悟りもみな消え失せたと云うことを、この「教行証御書」の前の方にお書きになっておられます。しかし大聖人様が出現して、この日本国に南無妙法蓮華經を流布せられ、一間淨提第一の本尊を建立せられて南無妙法蓮華經を唱へられて以後は、即ち釈尊の正法時代と同じように南無妙法蓮華經の大白法、即ち經と、それを修行する我々の南無妙法蓮華經の修行、それによつて得る即身成仏という証果、この教・行・証がここに備わつた、昔と同じように立派に備わつたのであります。と、こう仰せになっておられます。既にこのために大聖人様がこの日本国に上行の再誕として出現せられた。そして神力品に於いて結要付属せられたところの南無妙法蓮華經をお弘めになつて居る。だから、日本・中国或いは世界、「一切衆生は金輪聖王の出現の先兆の優曇華の花に値ふるなるべし」、即ち優曇華の花といふのは一往三千年に一度咲くと云われております。けれども、何年もかかって初めてこの世に出て新しい立派な花を咲かせるという、瑞相の花であります。

大聖人様が日本に出現して御本尊を建立遊ばされ、南無妙法蓮華經を流布せられたのは後に必らず金輪聖王が出現する。轉輪聖王といふ人は、弘法に於て理想の王様とするのであります。弘法を流布するところの出世間の王様を轉輪聖王と申します。この轉輪聖王の内でも又、金銀銅鉄といふふうに分けられて、最高の金輪聖王、だからこれを金輪聖王と申します。この人の出現によつて南無妙法蓮華經の流布をお手伝いする。そこに広宣流布の出現ということが理想とせられ、広宣流布の暁ということはこのことにあるのであります。

轉輪聖王の出現によつて、本宗に於いては日目上人の再誕が現われて王弘冥合してはじめて広宣流布が完成するのである。それまでは我々は広宣流布の途上にある。途上といつても、その大きな一つの流れとみればよいのです。今、日蓮正宗の信者が七百万から八百万ある。その中は皆広宣流布の姿で、立派に広宣流布の世界であります。その大きな流れは流行と申しまして、一つの流れである。それが全部に互つた時、たとえば田圃に水を引く、はじめのうちは水がどんどん流れ込む、それが流行の姿、そしてその田圃に水が一杯入つたのが今度は流溢と申します。満ち溢れることです。だから広宣流布の完成した暁ということは一田圃に丁度水が一杯になった姿であります。そこが王弘冥合の姿であるのです。それは理想です。そこへ行くまでは、我々はどこまでも折伏して妙法蓮華經の修行を積まなければなりません。